

仏教

幸福と自由の心理学
セルジユ・コルム



幸福の学と生きるすべ

苦悩というものがある。苦しみよ去れ。しかし、いかにして。苦悩を断ち切ることにについて、幸福の学はわれわれにこう教える。この世は苦である。人生は悪夢にすぎぬ。目覚めよ！ よりよい人生、より美しい真実がある。

苦しみを終わらせよ。不幸を死に至らしめよ。労働という別の苦痛によってではなく、自らの内なる苦しみの原因を知ることによって。悲嘆の闇、苦悶の暗夜、不安

の未明、心労と不満で色を失った夜明け、知性のまばゆき光のもとで、これらは消え去る。

明晰な観念によって心を鎮め、精神から偽りの思考を洗い流そう。神話、誇大な幻想、巣くった悪魔と内なる暴君、癒し得ぬ渇きの元となる幻影、無知のなせる業、隷属の手先き、これらは明晰な知性の風が吹いたときに、一掃される。精神の健全なる者たちに幸福あれ！

意識のもっとも高い段階に上ろう。こうするだけで、この現代世界に蔓延する不幸は収まるであろう。

それ故、世界を知れ、それがどこから来たかを知れ、

そしてその行く先を選択しよう。

われわれが自らに行なえることは多々ある。自らを知れ。自らで自らを作ろう。不幸から解き放たれよ。自由に値する者が自由なのだ。自分を知ることにより、全体性——破れ目を合せ、結び付け、和解させ、そして引き裂く。また完全で、静かで、味わいのある平安でもある——についての完全なる意識に向かおう。

光、感情、そして希望の言葉がある。

「わたしは、苦悩と苦悩の終わりを教える」——最初にして永遠の英知の最良の言葉である。

サンスクリット語でブッディ (Buddhi) は、英知、知性、そして意識の最高段階での覚醒、及び光、知 (bodhi) へと導く深遠な理解ということである。したがって、仏教 (ブッディズム、Buddhisme) は「覚醒」とふつう訳されるが、実は単に英知、知性、理解、あるいはこれらに対する共感、すなわち語源 (ソフィア、sophia) と知識と態度という三重の意味における哲学を指すのである (ギリシャ語はよく引き合いに出されるのに、なぜサンスクリット語まで遡らないのであろうか)。そしてここから、仏教者 (ブ

ッディスト、Buddhist) とは、英知、理解、分析と直観による認識、諸科学の知識、及び審美意識を求めんとする哲学者を意味する。

しかし仏教とは、この名をもち、この名にふさわしい、より特有の、より豊かな哲学をもさす。その主題はわれわれ自身である。その目的は人間的条件の最も根本的な諸問題を解くことにある。このことが、仏教をこの問題の本質的側面についての他のすべての哲学をはるかに超える認識へと導くことになる。

この本質的側面の第一のものは個人、自由、幸福であるが、このことは他のどの時代の文明にもまして、現代文明がこれらに関する知識とその解決を迫られていることとわかる。それゆえ、われわれの個人的なミクロコスモスとともに、人類というマクロコスモスとその歴史を把握し、導くためには、卓越した深い仏教思想への認識が絶対に不可欠なのである。

本稿は最も明瞭な仕方、われわれについて、またわれわれのために書かれたものである。しかし古典的な仏教が何をいつているかに耳を傾けてみよう。仏教とは何

であるといっているか。仏教は何をなしたか。仏教はわれわれにとって何をなしているか。

苦悩を取り除くこと。仏教はこう定義される。「なんじは何者であるか」という問いに、仏教はこう答える。

仏教は幸福の学である。仏教は、不満、心配、苦悶、悲嘆、不幸を消滅させるものであるといえる。

仏教は何よりも心理現象を認識することであり、(これを無視した)他のすべての認識はその残りかすにすぎない。

以下に述べるように、仏教は人間、自由、哲学、科学の基礎を作り上げた。したがって、人類の半数にその印を刻したという以上に、仏教はわれわれの現代世界の源なのである。しかし仏教はまた、現代世界の諸問題についての前もっての解答でもある。さらに、現代世界の未来像でもある。なぜなら、仏教は完全なる解放であるからである。つまり、仏教とは自分で意識的に自己を作り上げることにあるからである。

現代のブルジョアや貴族、労働者やブチ・ブルジョア、農民やサラリーマンをとらえている生活水準、生活様式、

生き方を超えて、生き、考え、感じ、そして自己と関係するすが存在する。

もつとも西洋文明についてマックス・ウェーバーは二つの可能な未来しかないことをすでに見ていた。すなわち「まったく新しい預言者、あるいは古い思想と理想の力強い再生」による信仰の復活か、または「ある極度の空しさを伴った機械的な硬直化」、つまり「魂も展望もない専門家と心を失った享楽主義者」の成果を除くすべての人間的成果が不可能になるかである。

預言者はなくても、再生は可能である。後で見るように、仏教はまた、非常に進んでおり、いまだにその生をたもっている古代の地中海生活の哲学でもあったのである。

ところでわれわれの世界には、いまや意識と自由の新しい段階へと向かう機が熟しているように思われる。危機が四つのそれぞれ関連する局面において世界をゆるがしている。

つまり、経済、環境、社会、そして世界についての諸々の価値と観念である。危機は深刻なものである。これに

対応するために、二つのタイプの道具が与えられる。(経済分析をも含めた)技術は、経済危機を解決しうるであろうが、環境その他の危機については、社会や諸価値がそれを望まない限りは、技術は何もなしえないであろう。

したがって、これらの価値が主要な変数である。それ故、われわれの眼前にある本質的で緊急な任務は、われわれの文化の一般的枠組み、倫理的及び審美的価値、規範、われわれ自身と他者に対する態度、形而上学的問題に向う立場、そして世界についての観念と認識を構築することである。人類進化における偉大な革新、すなわち自由の跳躍とは、これらを意識的に選択することであろう。ところが人々が自ら選択することなく作り、理解することなく受け入れた歴史によって、これらのことが各々すべての人に押しつけられているのである。

この心踊る本質的な任務を達成するために、われわれはいくつかの手段を持っている。われわれの枠組みの母体であり、精神の母であるわが固有の歴史は、その中でわれわれが選択する具体的、個別的な諸価値の自然で主要な源である。しかしわれわれの精神、われわれの反省

能力が、作戦行動における將軍である。他の文化的伝統は、有益な示唆、あるいは事例を与えてくれる。そして、人間に関する人間の知識がすべて動員される必要がある。

ところで、これらの知識の中心のかつ理論的な核、まさに自ら自己を作るために彫琢されたそれらの本質的部分は深遠なる仏教と呼び得るものである。

しかしこれは、ヨーロッパ語圏の現代世界にはいまだ知られていない。私はここで、その本質的部分についての序論を述べる(より詳しく叙述するには、ただちに数多くの巻と「何回も生れ変わる」が必要になってくるだろう)。また、いかにしてわれわれがこれを得たかを述べる。そして、これがどのようにわれわれの問題を解決するかを、みることになる。

さらにまた、深遠なる仏教は、その通常の実践において、人格的、個人的な側面に関する極めて独特な方法がある。これは苦悩、不安、苦痛、悲嘆など(これらすべてでは、われわれ固有の心理に原因の一端がある)を除くため

に、われわれ自らの心理現象を制御し、これを構築するということである。

こうした治療とは別に、仏教はわれわれの心的能力を増大させることもできる。これらのために、仏教は心理現象、哲学的態度の認識と自己形成の実践的方法を与えてくれる。

他方、この心理の認識は、人間存在に関わるすべての現象を理解し、これに働きかけを行なう際に必要でもある。

あらゆる苦悩の共通の原因は、苦悩するこの「私」である。これを分析することが、苦痛を効果的、持続的、一般的に減少させる鍵である。仏教はこの発見から出発する。したがってこれは、主たる原因が「私」の感情であるような苦悩に対して特に適している。そこで、「発展した」諸社会の個人主義の結果であるといえる現代世界のすべての悪に直接的であれ、間接的であれ、当てはまることになる。

というのもこの個人主義は、「伝統的」な諸社会とは対照的に、欲望を常に増大させ、欲求不満や生存競争を

引き起こし、その中で自由への欲望は、抑圧され、選択と責任の不安をもたらし、社会を予測不可能なものにしているからである。

またこの個人主義は、アノミーや孤独をもたらし、社会的紐帯ちゅうたいは個別化するにつれて非人格的なものになり、競争が激化し、地位獲得と社会関係構築の必要が生まれ、他者の評価は絶対的な圧政のように裁判官を越えた者の声として本来評価不可能な行為にまで及び、肥大化した自我を悩ますが、これが愛によって報われることはないのである。

これらの悪を治療する、一つの方法は、個人的自由を放棄することである。もう一つの方法は、これとは逆に、この自由を拡大し、自らの欲望と感情を選択し、自己自身によって自己を形成し得るようにすることである。いしかえれば、ファシズムか仏教かである。以上が自由主義に対して聞かれている解答と未来への選択肢であるが、この半自由は、多く人々が何をなすかを決定し、何を所有するかを稀に決定するが、決して何であるかを決定しないのである。

したがって仏教は、個人が自ら個人を乗り越えるという方法で自由を救うことができる。現代世界においては、自由が部分的で不完全でしかないがゆえに不安が生じるのであるが、仏教は現代世界における自由の価値の擁護者である。仏教は、自ら存在することを欲することで西洋を救うことができる。

なぜなら、ある種の伝統は生活にとって塩のように価値あるものであるから、これを守り、再建しなければならぬとはいえ、第三の選択としての伝統への回帰はほとんど不可能だからである。仏教のみが人間を隷属化から解放し、自由を内容豊かなものとして救いあげることができる。仏教は解放の達成であり、この解放はバステイーユ牢獄を取り払うというよりは、むしろ獄舎を宮廷に変え得るものである。

したがって仏教は、まさに現代世界が必要とする治療法である。しかしこの定めは偶然ではない。なぜなら第二のものは、第一のものの結果だからである。つまり（古代を介した西洋への影響を）以下に見るが、人類は、一方

で、人間、人間的自由、普遍的人間に関する相互に関連した諸観念を、他方で、普遍的因果律という仮説、最後に自己認識の観念と方法を仏教に負っているからである。

最初のグループからは普遍的たらんとする使命を帯びたすべての運動（宗教、イデオロギーなど）が由来するが、これは仏教を筆頭として、ストア主義、キリスト教、イスラム教、また現代の偉大な非宗教的イデオロギーたる自由主義、社会主義など連鎖的に続いている。因果概念とともに科学を生み、自己認識の観念とともに哲学を生み出した思考の自由性もまたここから出てくる。交換に適用され、自由は企業と市場を生んだ。科学とこれに由来する技術とともに、この企業と市場は世界のあらゆる経済的、物質的成果を創り出した。また同時にこの人間という観念は、自由、平等、民主主義の観念、またこれらの実現に導くのである。

しかし、われわれ西洋の歴史を理解するために仏教思想を知ることが必要であるのは、このことがまた世界全

体の歴史と現状を知り得るためのより賢明な準備でもあるからだ。なぜならイラン、あるいはイスラム圏から東の、人類の半分は（現代ヒンドゥー教を介してであれ）仏教的素地の中から出ているからである。これらの文化のすべては、深遠なる仏教という同一の観念的心臓部（coeur conceptuel）から湧き出しており、それぞれが仏教の色彩豊かな衣であり、光輝く礼装であるといえる。仏教を知ることなくして、これらの文化を理解することはできないのである。

したがって、現代人類の本質的部分は、二千五百年前にエヴェレストの山麓から湧き出て、ここから地球全体に流れ出したと述べても過言ではない。なぜなら、インドヨーロッパの賢人カピラ、マハピラ、ゴータマはここに生れているからである。しかし古代思想を介して西洋に伝わる中で、「人間」はついに「天地創造」思想によって失われてしまった。

ここにおいて「人間」は、自ら自己を創りあげることができるといふ考えを捨て、人間を個物へと変形させてしまった。幸福を苦痛とともにのみ、存在を苦悩とともに

にのみ許す、不完全で偽りに満ちたわれわれの自由の概念は、ここに由来するのである。

深遠なる仏教は、至高の解放を目指す哲学的心理的方法によって、欠落したものを回復する。しかしさらに、仏教はこれに二つの有益な特徴を付け加える。一方で、仏教は西洋的でもなく、また現代的でもない。他方、仏教は現代思想とともに、もろもろの差違と対立を提供するが、いくつかの例外的な共通点がこの二者を他のほとんどすべての思想から区別するのである（たとえば、人格主義、合理主義、決定主義、科学的方法、幸福主義）。この三局面により、深遠なる仏教は現代社会に三つの奉仕をなすのに唯一適したものとなっている。

まず、現代世界をして、自らに自己を知らしめること。なぜなら、一つの文化をよく知るためには、他の文化の観点からこれを見る必要があるからである。つまり、この仏教という天文台から我々の文化を観測して、ここにわれわれが発見するものこそが本質的であり、これは他の方法では得られないものである。

次いで、意識的な文化建設の試みに向けて、哲学的選択、心的態度、心理科学、認識と改良の方法、理解、美学、制度的構造などの適切で、大胆かつ根本的な諸観念を現代世界に提供すること。

最後に、われわれの時代の地球的惨劇、現代性による諸文化の圧殺を知り、これを治療すること。

進取性に富み、あるいは分析的な、あるいは学問的な、あるいは科学的な、あるいは理論的な深遠なる仏教は、人間と人生の心理学であり、哲学である（これに自己認識と自己形成の相互に関連した心的方法を加えることができよう）。

深遠なる仏教は、進歩的で、また深められた科学であり、仏教が説く言葉の深い、あるいは真実の意味である。仏教の流派は表面的には極めて多様であるが、深遠なる仏教はこれらすべての流派に共通するものである。より一般的言うならば、これは東洋思想全体の、洗練された部分、基礎（あるいは最先端）である。

仏教はこの深遠なる仏教を（括弧つきで）「仏教」、あるいは仏教そのもの、あるいは本来の仏教、あるいはいま

た、「深遠」な意味や「学問的」な意味を特に際立たせたい時は、「皮相的」や「表面的」を意味するニタルタ（nītartha）に対立させ）ネヤルタ（neyartha）、あるいは本質、目的、隠された意味、アンタ（anta）、あるいは単に「分析」、あるいはまた（論理や認識論よりもっと広い意味である）ニヤヤ（nyaya）、プラマナヴァダ（pramānavāda）、またパリー語で（教条を意味するディティヴァダ⁽³⁾（dīṭhivāda）に對比させ）ヴィバジャヴァダ（vibhajjavāda）と呼び、われわれもこれらの言葉を用いることにする。

その実践は、プラジュナ・ヨーガ（英知によって結び付け、prajnyāyoga）である。なぜならここには、自己でないもの、つまり宗教と、自己であるもの、つまり自己⁽⁴⁾と、他者と、そして世界とに対する関係、あらゆる意味での哲学、つまり生きることの認識とすべを読みとることができ。

この思想は、（治療的）意図、極めて洗練された心理学的理論、自己の理論（自我、私、個人、人格）、についての理論（幸福追及のための）個人的行為の倫理学、認識論、（心理現象の）認識方法、存在論、そして形而上学的問題

題に関する立場を含むものである。これらすべての要素が、緊密に統合されており、相互に関連づけられている。

最後に、この思想を知り、理解し、それがいままなお留保しているいくつかの根本的問題を解決し、それをわれわれの問題、それによって救われ得るわれわれの文明、そしてわれわれ自身に適用することが残っている。

西洋の無意識

「東洋の哲学は、われわれ西洋の哲学とは極めて異なるものの、われわれにとってはかりしれないほど貴重な宝庫である」。今日までの西洋の思想家で仏教について最も精通していた精神分析家C・G・ユングはこう明言している。⁽⁵⁾

彼はこう正確に述べる。「東洋の心理学の知識は、実際、西洋の心理学のあらゆる客観的理解のための、同様に、これを批判するための不可欠の基礎を与えてくれる。そして、西洋の文字どおり悲しむべき精神の状況を見るにつけ、われわれの西洋的偏見をより深く理解することの重要性が過小評価されてはならないであろう」。⁽⁶⁾

精神分析学、実存主義、分析哲学、現象学そして心理学など、現代思想の栄光は、しばしば東洋の最も優れた諸学者が年来理解してきたものの微少な部分を再発見させたにすぎない。その部分とは、後に見るように、萌芽的で部分的な原仏教として、多くの側面においてあらわれている。

また、われわれがアジアに生まれた人間の学を、西洋と現代にとつて単に有用なものとするだけでなく、実際、他の何に対してよりも西洋の諸々の問題、欲求、状況に對して、他の何にもまして適合的なものにするために提出する諸理由に加えて、ユングは一つの理由をあげている。

それは西洋における無意識は、東洋の「明らかなる」心理態度と非常に似ているように思われるという点である。ユングはこう結論しているが、その説明は少なくとも一抹の真実を含んでいるようだ。⁽¹¹⁾したがって東洋の心理学は、直接的観察によって比較的容易に心理的構造、あるいは心理的現象を発見できたが、これらは、われわれ西洋人にとっては、無意識の中に埋もれており、本質

ユングはまたこうも述べる。ヨーロッパにおける人間の魂の理解と「医者として」のその実践は、仏教思想すなわち、「尽きない助けと刺激」、「多くの刺激的な観念と発見」、「多くの根本的な認識」に負うものである。⁽⁷⁾しかし彼は付け加える、「この仏教思想に精通するためには、これを獲得しなければならぬ」。⁽⁸⁾これこそが鋭い洞察力によって本質的に彼がなしたことである。なぜなら彼の仏教に関する知識は極端に少なく（いくつかの短い文献）、それほど深い知識はもっていなかったからである。⁽⁹⁾それでもなお、仏教について最も知っていた西洋の思想家は彼なのである！しかし彼は、「どんなものであれ仏教について知る前に、何世紀も東洋の最も優れた精神をとりこにしてきたこの秘密の道を自分も無意識に辿っていた」⁽¹⁰⁾と指摘する。

そして、これが、西洋文明の「不安」と「欲求」によって心をかきたてられ、諸問題を解釈し、文明を理解し、人間を説明しようとしている現代西洋のすべて思想家に起こっていることなのである。彼らは最小限の深さには達している。

的たりうるものとなっている（そしてたぶんわれわれ西洋人は、まさにこれらを意識にのぼらせまいと多大な努力をしているのだ）。本質的とみなし得る心理現象は、西洋にもやはり同様に存在することはもちろんだが、少なくともこれは西洋より東洋においての方がはるかに容易に知覚されうる。

心理態度の形成における文化の重要性を考えてみただけで、これらの違いを説明するに十分である。そしてこうした違いは、深遠なる仏教のわずかな心理学的優位を説明しよう。したがってもし東洋の心理学やこれの伴侶である東洋哲学の諸側面を奇妙でなじめないと感じる西洋の精神があるとすれば、それは多くの場合、単に西洋の意識的な思想が自らの無意識をそう感じるからである。

この無意識は、意識に対して過去には、恐るべき悪魔や支配者たる魔物を課し、現在は神経症、精神病、神経衰弱を引き起こしている。そしてこの苦悩に満ちた自己疎外と自己分裂に終止符を打ち、魂と感覚の平和を意識にもたらし得るのは、この無意識を認識すること以外に

ないのである。

しかし現代的な問題に関して深遠なる仏教に適切な答えを仰ぐ主な理由は、それが自我と自由にかかわる問題になっているからである。

自由への道程

さて、二つの事柄が、とりわけ現代人に影響を及ぼしている。すなわち自由の欠如と自由である。この自由があるために、人は選択、不安、責任、そして孤独の苦しみを味わうはめになるのである。この苦悩には、二つの処方がある。

すなわち、自由を減ずるか、あるいはもはや苦しみを体験しなくてもすむ状態を選択し得るほどに自由を拡大するかである。いいかえれば不安から解放されるか、あるいは自由そのものから解放されるかである。したがって、何者かによる、あるいは再発見ないしは新たに創造された伝統による独裁か、または仏教をとるかということになる。

しかし伝統だけでは自由を窒息させてしまい、赤ん坊

る。

そしてそれはまったく、他者との多様な関係の中にある諸個人によって十全に成り立ち、またそうした関係によって形成されるものとして描かれた最初の社会でもある。現代の他の諸側面は、そこから生じている。個人という観念は、このように、社会を考える際のわれわれの思考やわれわれの諸制度の素材であるだけでなく、同時に自由な交換から生れた「産業革命」や、自由な思考から生まれた科学の素材でもある。

個人の自由は、現代を分かち二つのイデオロギー、すなわち自由主義とマルクス主義の倫理的な準拠点である。自由主義は、賃金制度を自由な交換として正当化し、マルクス主義はこれを、自由の窃盗、そして偽善的奴隷制度である搾取として隷属的なものと判断している。しかしわれわれの世界を作りあげたこの個人主義は、すでに指摘されてきたように、この世界の深い苦悶の中心的な原因でもある。近代人は自我という病氣にかかっている。その世界は何よりも、それぞれの「私」に苦しんでいる。エゴというのがその病名である。痛切な不如意を

を風呂桶の水に投げ込んでしまうようなことになる。

また伝統の多くは、何者かによる独裁でもあった。そのうえ過去への単なる回帰は、ほとんど不可能に思われる。逆にファシズムは、どのような形のものにせよ、起こり得る可能性が極めて高い。しかしファシズムは豚肉を調理するのに、納屋ごと焼いてしまうようなものである。

したがって、もし現代社会の問題を解決しようとし、単一の伝統に戻ることはできず、独裁的な解決法を望まないというのであれば、ひとはより深い自由、すなわち仏教を指向することを余儀なくされるのである。そのうえ以下に見るように、多くの変数を考慮する時、これこそが歴史が示してくれる方向なのである。

ここでいう自由とは、まず個人の自由ということである。ところで、この個人は、現代西洋文明においては、特殊な、そして中心的な役割を演じているが、そこでは個人の自律性というものが、議論(説明)の源であり、正当性の土台、権利の対象となっている。現代世界の人間が最初の個人主義者だという訳ではないが、近代社会は何よりも個人の集合体とみなされた最初のものである。

感じる者がいたり、大きな不快を感じる者がいるのは、社会における強い「平等主義」の帰結である。

それゆえ現代の中心的問題は、個人の自由を制限することなく、むしろ増大させながら、個人主義のそうした帰結を取り除くことである。この病には三つの処方が可能である。そのうちの二つは、伝統とファシズムであり、これらはすべてを根絶してしまうことになる。残るは、この個人というものがまさしく何であるか、そしてこの病から逃れるために、その正確な原因が何であるかを分析することであろう。これこそが仏教の主題なのである。

仏教は個人の発見者であると同時に、その中心的教義は、「非我」と呼ばれるものである。不幸にも、仏教から古代ストア主義へと至る間に、個人は、その解毒剤である非我を失ってしまった。しかし個人は自己形成、すなわち自ら自己を形成するという観念と方法を保持し続けていた。しかしながら、古代から現代へと移っていく間に、そのすべも失ってしまったのである。創られたも

のとしてでなければ、与えられたものでないとすれば、自らを考える存在となるために、個人は自らのエネルギーを外部に振り向け世界を変えようとしたのである。というのも、個人は自分自身を、表には巧妙で有能な存在として描き、心の底では不器用で痛ましい存在として描くことができないからである。

それゆえ、その解答は、種々の文明、大陸、そして数千年を通じての個人のこの長い歩みの中で失われたものを再び見出すこと、また人間という概念、そして人間の自由という概念の源である二千五百年前のインド（ここから人間の西洋的、現代的な冒険が始まるのだが）に立ち戻ることにある。

しかしまた、この解答は歴史の方向でもある。われわれの現代性は、この九世紀間に西洋世界の中心で生れ、徐々に育ち、近年他の世界に急激に広がった。個人と自由が、その中心の特徴である。個人はこうして社会から現出した。そして自由は新たな空間、新たな領域を手に入れた。その歩みは時にゆつくりと、時に政治、経済あるいは習俗の「革命」の形をとってすばやく、また後退

によって中断されそしてなお未完のままである。しかし長い道程におけるグローバルな傾向性は明らかである。他方、自由とその使用は、必然的に様々な可能性についての認識と意識を伴う（認識というものがあつう合わせもつ性質が、歴史は一つの方向性を持っているというこの主たる理由である）。

しかしこの数世紀にわたる運動は、今や転機に立たされている。物質的、経済的、人間的、集合政治的（民主主義的）、文化的自由の太いなる獲得と、無知の圧迫による後戻りのあとで、時代の波が新たな領域の入口に押し寄せている。すなわち、その新たな領域を征服しつつ、個人は自ら解放されていく。いいかえれば、ますます自己を意識的に鍛練していくのである。これは、個人と自由との間の結合関係の大いなる逆転である。

自由は個人のためにこの九世紀の間働いてきたのであるが、今や個人に対して敵対し、可能な限り破壊しようとしている。自由があればこそ、個人は自らの意志と知識を何らまじり気のない、他に介入を受けないものとし、矛盾も破壊もなく、文化を選択することから逃れること

ができたのである。しかし、この内的領域の性質と幸福

への願望とが、常に必要な認識がここにあり、かつ十分であるようにするものである。人は自己を知ることにより、自ら解放される。そして、この意識こそが、まさしく深遠なる仏教であり、それはこの意識から自己形成の方法を演繹している。

したがって仏教とは、解放の完成である。仏教は現代性のはるかな源であったが、今や現代性の未来としてあらわれている。認識は、この運命を予見し、導き、最良の場合には実現し得るのである。

さらに、人間あるいは文化と同様にわれわれ自身のことを理解するために、そしてわれわれの社会、その過去と現在と未来を理解するために、また現代性と呼んでよい人類の現状とその揺籃であった西洋文明を理解するために、深遠なる仏教が不可欠なのである。いくつかの理由——その各々が十分なのであるが——によってこの結論が導かれるのである。それらを正確に述べよう。

一つには、人間とその心理現象についての仏教的認識である。これほど深い洞察力をもったものは他に類がな

い。

もう一つは、われわれの文化の鍵ともなる概念が、仏教に起源をもつということ。すなわち人間、個人的自由、普遍的人間、普遍的因果律などである。

しかし、最も肝心なのは、おそらくこの仏教が、非西洋的、非現代的世界についての一般的な諸見解の中で、はるか以前からもっとも洗練されたものだということである。というのも、何かをよく理解する場合には、それを同時にごく近い所とごく遠い所から、すでに見ていなければならぬからである。自ら自己を知るには自らを客観的に分析できなければならない。

ひとつの文明を理解し得るには、その文明とすでに体験し、同時に他者の目でこれを眺めることができない。ばならない。しかし、それを把握するのみならず、可能ならばその視線は対象となるものを貫き、これを科学的に分析しなければならない。

したがって、われわれの社会と現代文明を理解するには、その中に身を置きながら、深遠なる仏教の視点と理論を同時に適用しなければならない。深遠なる仏教は決

して他と代替できるものではない。さらに、それはいくつかの側面ではわれわれの社会と現代文明から可能なかぎり、もっとも遠く離れており、これが、他の側面ではそれらに同化しながらも、同時に必要な「間隔効果」を与えるのであり、また理解と対話を根づかせるものなのである。

註

- (1) 同様に、「覚醒した」とふつう訳されるブッダ (buddha) は、実は「英知 (知性) のある」という意味である。「覚醒した」という訳は、むしろボディサットゥヴァ bodhisattva 「知 (bodhi) の本質」にあざわしい。
- (2) Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie および Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre. また L. Strause, Droit naturel et histoire, Ed. Plon, 1954. を見よ。
- (3) ブッダが有名なスッパ・スッタ (Soubha sutta) 第九章を締めくくった、「私は教条主義者 (dithivadi) ではなく、分析家 (vibhajjvadi) である」の意味である。深遠なる仏教の文献的な出発点は、ブッダの「遺言」であり、知られる最も古い文書 (バーリ語聖典) である三

つの「蔵 (piaka)」の最後のもの (最も深いもの)、アビダンマ (Abhidhamma) である。しかしこの文献は、口伝についての古典的分析の記憶の集成にすぎない。そしてこの基礎と残された他の口承的な基礎から出発して、二十世紀間にわたる発展は無限の広がりをもつことになった。二番目の出発点は、マディヤマカ (madhyamaka) である。

- (4) サンスクリット語ヨガ (yoga) は、フランス語ジョンクシオン (結合 'jonction') になった。またコンジュガル (夫婦の 'conjugal')、ジュ (くびき 'joug') など、この派生である。ルリジョン (宗教 'Religion') は、注意深く観察すること、集中することを意味するレゲレ (relegere) から出ている。しかし公式の (そして誤った) 語源はこれをレリゲレ (結び付ける 'reliere') から来たものとして、これにストア哲学に影響された教父によってあてられたヨガ (yoga) の意味を与えているが、この関連づけはストア哲学に影響された教父によってなされたのだが、ストア哲学自体がはるか以前においてインド仏教思想に影響されていることは確実である。
- (5) Der Weg zum Selbst : Lehre und Leben des indischen Heiligen Shri Ramana Maharshi aus Tiruvannamalai, (H. Zimmers 譯) Zurich, 1944) の序で Les saint hommes de l'Indo".
- (6) Ostasien denkt anders, Zurich, 1950. の前書。
- (7) Sur les discours du Bouddha ' 及び Barido Thodol

の序において、彼はこの「チベットの死者の書」が彼の「たえざる伴侶」であったと述べている。

- (8) 注5参照。
- (9) Le Secret de la fleur d'orの序説。
- (10) 注6参照。

(フランス社会科学高等研究院教授)
訳・高橋寿美江

〔追記〕本論文は、セルジュ・コルム著『幸福と自由』の序文を訳出したものである。